

「ピア・サポート」を軸とした小中連携

～予防的生徒指導の取組～

京都市立久世中学校

久世の子どもたちの社会性(ベースとなる自尊感情・自己有用感)を育む手段として「日本のピア・サポート・プログラム」などの手法を参考に行事等の見直しに取り組んできた。そしてH18～H20年度の3年間をかけ、教職員や地域社会の理解と協力を得て、3年間の見通しをもった社会性育成プログラムをつくりあげた。

H19より「ピア・サポート」を軸とした小学校との連携も始まり、現在では小学校においても計画的に「ピア・サポート」に取り組んでいる。

小学校において「自己有用感を育む取組」が軌道に乗ってきたことを受け、中学校では「ピア・サポート」を精選し、他者との関わりの中で社会性を育む一連の取り組みを「ふれあいタイム」と位置づけ、子どもたちの「自己有用感」を育成していきたいと考えている。

取組の目的の共通理解を十分に図ることで、取組が形骸化することを阻止して、それぞれの取組が、久世の子どもたちの社会性を真に育成する取組となるように、事前活動から事後活動までを含めて計画的に実施していきたいと考える。

I. 社会性育成のしくみ

(1) 他者との関わりの中で、参加するすべての生徒が自己有用感を獲得する。

特に「ピア・サポート」では、参加するすべての子どもにリーダー体験をさせるために、年齢の差・経験の差を利用したお世話活動を展開する。

(2) 事前活動→事後活動のなかで育てる

子どもたちが主体的に課題に取り組み、そこで得た意欲や感情を定着させるために、十分な事前学習・事後学習の場を準備する。教師主導の活動の中では、子どもたちの育つ機会が奪われてしまう。

(3) 校内に3年生をリーダーとした好ましい縦関係を構築する

3年生をリーダーとする異学年交流活動の中で3年生の自己有用感を育成するとともに、3年生には最上級生としての「自覚と責任」、1、2年生には3年生に対する「あこがれ」の気持ちを育てる。

(4) 全教職員で3年生を育てる

多くの教職員から声をかけられ認められることによって、3年生の育ちが大きく促進される。また、全教職員が3年生の育成にたずさわるシステムを作ることで、教職員の学年間の交流が深まり、共通理解が進むものと考える。

(5) 3年間を見通した一連の取り組みの中で育てる

1つ1つの取り組みがバラバラの目的を持って独立しているのではなく、「子どもたちの社会性(心)を育てる」という1つの目的を軸にそれぞれの取り組みがつながりを持っている。